日本スポーツ社会学会第36回大会　学生フォーラム企画シンポジウム（第一報）

研究委員会学生フォーラム世話人　八木一弥（立教大学）
藤杏子（立教大学）
船木豪太（早稲田大学）
小杉亮太（一橋大学）

いま私たちは何を問い、何をしようとしているのか
―自身の研究を問うことを通してスポーツ社会学という営みを考える―

昨年度のシンポジウム「スポーツ社会学者は何をしてきたのか―「あなた」の語りから―」では、長年にわたり日本スポーツ社会学会に関わってこられた4名の研究者（井上俊先生、菊幸一先生、坂上康博先生、杉本厚夫先生）へのインタビューを実施した。そこで語られたのは、それぞれの研究者が何に関心を抱き、何を問い、どのような視点からスポーツや社会を捉えようとしてきたのかという、多様な研究の歩みであった。

4名の語りからは、スポーツや社会を理解しようとする際の問いの立て方や、研究対象への向き合い方が、決して一様ではないことがうかがえた。井上俊先生からは、社会学を通してスポーツについて理解するだけでなく、スポーツを通して社会学そのものが学ぶことの重要性が語られた。こうした双方向的な学びのあり方は、今回の企画を考えるうえでも示唆的である。自らの問いを携えて他者の研究の営みに触れることは、その研究者から何かを学ぶだけでなく、自分たちが用いてきた視点や方法、さらには問いの立て方そのものを考え直す機会にもなりうる。

本年度は、こうした昨年度の試みを引き継ぎながら、視線を現在の私たち自身へと向けてみたい。すなわち、「いま、私たちは何を問い、何をしようとしているのか」という問いを出発点として、他者との対話を通して自身の研究の営みを捉え直し、そこからスポーツ社会学という営みについても考えてみたい。

本企画では、4名の世話人それぞれが現在抱えている研究上の問題関心や問いを出発点として、その問いについて考えるために話を聞いてみたい研究者を選び、事前インタビューを実施する。インタビュー対象者は、必ずしもスポーツ社会学を主たる専門領域とする研究者に限定しない。これは、異なる研究領域との交流自体を目的とするものではなく、それぞれの世話人が自らの問いを追究するうえで、他者の研究経験やものの見方に触れることに意味があると考えるためである。

こうした4つのインタビューを通して、それぞれの世話人が何を問い、対話のなかで何を考えたのかを持ち寄り、そこで得られた気づきや新たな疑問を手がかりに、私たち自身の研究の営みを問い直しながら、スポーツ社会学について議論してみたい。

私たちはいま何を問い、また自らの研究を通して何をしようとしているのだろうか。先人たちの歩みから自分たちの現在地を問い直した昨年度に続き、本年度は、自らの問いを携えて他者との対話へと向かい、再び自分たちの研究へと立ち返る。その往還のなかで得られた気づきを手がかりに、

自分が知りたいことを追究するうえで、スポーツ社会学という学問はいかなる意味を持ち、何を可能にするのか。そうした問いについて、参加者の皆さんとともに考えてみたい。